

科目区分：芸術文化課程（音楽文化コース）

授業科目名：ソルフェージュ

対象年次：2年次

聴音と視唱を中心とした音楽の基礎的学習

音楽教育講座・福富 彩子

1. 授業の目的と到達目標

本授業は、楽譜を読むための技能を身につけ、音楽の基礎理論を理解することを目的としている。到達目標は、音楽を聴き取り、音の高さやリズムを正確に楽譜に書き表す能力を身につけること。さらに、小中学校教材程度の簡易な楽曲について、楽譜に示された表現に関わる指示（デュナーミク、テンポ、表情記号など）を正確に読み取り表現できることである。なお、関連する DP は、「充実した生涯学習社会を築くため、音楽文化に関する確かで幅広い知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）」である。

2. 授業の概要について

本授業は、芸術文化課程音楽文化コースの2回生を対象とした授業であり、中・高の教員免許状取得に必要な科目として後期に開講されている。今学期、受講生は9名であり、全受講生がソルフェージュの学習経験を有していた。

授業の概要は、主に聴音や視唱を中心に演習形式で行う。例えば、ピアノで演奏された簡易な短旋律を楽譜に書き取る演習や、コールユーブングンを教材として楽譜に記された音や指示記号を理解・イメージして実際に歌いながら表現する、といった基礎的演習である。さらに、様々な音部譜表の読譜やリズム打ち、音楽の基礎理論の学習などにも取り組んだ。

3. 授業内容に関する工夫点

1) 多様な課題の実施

ソルフェージュは、音楽の主要素を分解して段階的に学習するため、多様な課題に取り組むこと

が必要である。したがって、本授業では、リズムや音程、和声、指示記号の理解など、楽譜を読むための基礎的能力を高めるために様々な教材を用いた課題演習中心の授業を行った。

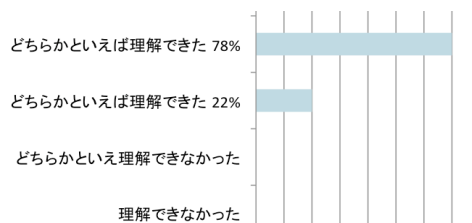
2) 到達目標に向けた段階的学習

聴音の旋律課題は授業者が作成、もしくは既存課題に手を加えたものを教材とした。その理由は、クラス内のレベルや個々の状況に応じた臨機応変な対応が可能だからである。例えば、受講生が不得意とするリズムパターンがあれば、そのリズムに慣れてもらうための課題を作成して実施することができる。調に関しては、ハ長調から始めてその近親調へ、調号や臨時記号の多い課題、転調課題へと段階的学習を進めた。さらに、リズム習得のため、聴音課題の中でも付点やシンコペーション、3連符といった基礎的リズムに特化した課題を実施し、音程の記されていないリズム譜での演習も行った。今回は、全受講生がソルフェージュの学習経験を有していたため、ト音譜表やヘ音譜表に加えてアルト譜表の読譜など発展的学習を行うことができた。

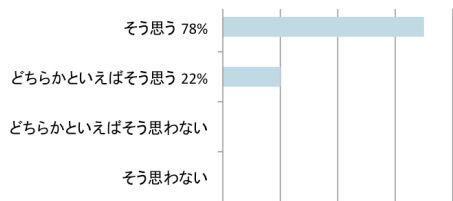
4. アンケート結果

授業終了時、受講生9名を対象として4段階評定による次の10項目のアンケートを実施した。

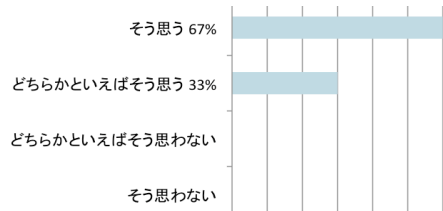
1. 本授業の目的について理解できましたか。



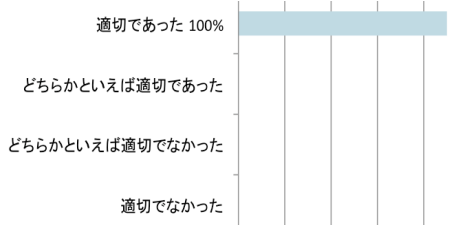
2. 本授業はシラバスの通りに行われていましたか。



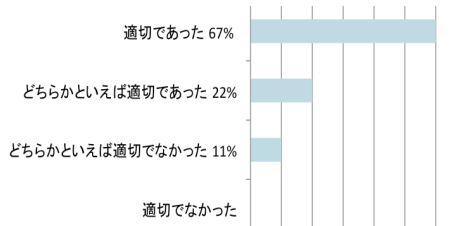
3. 本授業に興味を持つことができましたか。



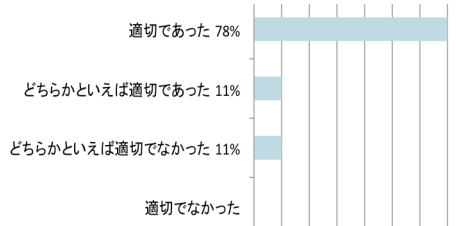
4. 本授業で用いた教材についてどう思いますか。



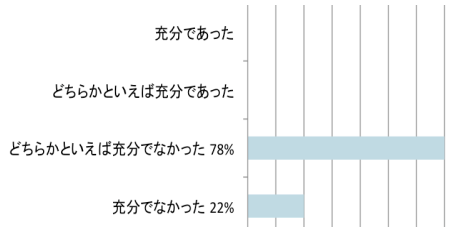
5. 本授業の進度についてどう思いますか。



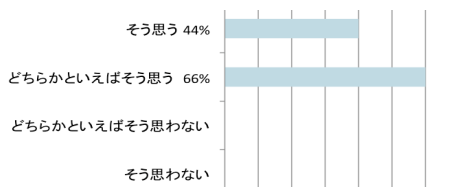
6. 本授業の難易度についてどう思いますか。



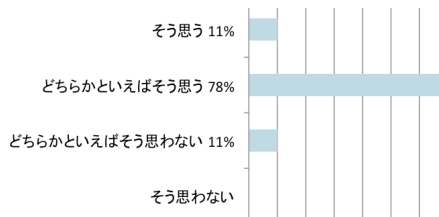
7. 授業時間外学習の取り組みはどうでしたか。



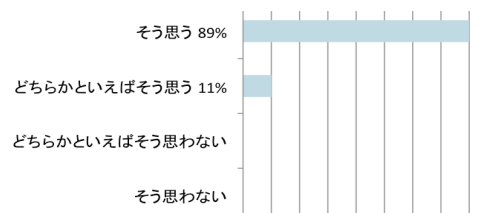
8. 受講後、新しい知識や技能を得ることはできたと思いますか。



9. 受講後、到達目標は達成できたと思いますか。



10. 本授業は、音楽の基礎的学習に有効であると思いますか。



5. 今後の課題

アンケートでは、授業で用いた教材について受講生全員が「適切であった」と回答した。さらに、本授業における目的の理解度と興味関心、新しい知識・技能の習得、音楽の基礎的学習に効果的であるといった面においてもポジティブな評価を得ることができた。しかし、授業時間外での取り組みについては、全員が「充分でなかった」「どちらかといえば充分でなかった」と回答した。その要因の一つは、視唱課題であるコールユーブンゲンの予習復習を授業時間外の課題としていたが、授業中は全員もしくは複数人で課題を演奏することが多く、発表時の緊張感が乏しかったためではないかと考えられる。また、聴音は一人での課題実施が困難であるため、授業中の演習のみとなってしまった。ソルフェージュは、継続的に多くの課題に取り組むことが学習効果に密接に結びつくため、授業外の学習時間に多様な課題に触れることが大切ではないかと考えている。次年度は、授業中の個々の発表時間を増やすなど、受講生の意欲的な取り組みに繋がるような工夫を考えたい。

今回、受講生間のレベルの差異はほとんどみられず、課題実施もスムーズであった。しかし、難易度や進度の面で少数意見ではあるが「どちらかといえば適切ではなかった」との回答も見られた。今後、ソルフェージュの経験の有無や経験年数などでレベルに差がある受講生への課題実施の工夫が必要であることが浮き彫りとなった。